

組踊創作 300 周年と躍奉行

田名真之

(沖縄県立博物館・美術館館長)

昨 2019 年は、玉城朝薫が組踊を創作してから 300 年の節目の年であった。沖縄県が中心となって組踊保存会や各種芸能団体、マスコミなどを結集した実行委員会が組織され、組踊公演やシンポジウム、展覧会等々が展開された。この 3 月には締めめの委員会が開催されるが、「組踊」を内外に広く喧伝するとともに、今後の継承、発展に繋がる取り組みであったと言えるだろう。

私はいくつかの事業に関わり、玉城朝薫や組踊について話す機会も何度かあった。そこでの話の一つに「躍奉行」がある。躍奉行とは、故国王や王妃の回忌法要に際して任じられたもので、法要の一環として芸能が提供されたと考えられている。一方で冊封使渡来時には七度の宴席が設けられていた（開始時期は不明）。その際にも芸能は当然提供されたはずである。が、冊封での躍奉行の任命は朝薫以前の事例は知られていない。また回忌法要の躍奉行は通常 5 人体制（按司奉行 1 人、親方奉行 1 人、座敷奉行 3 人）であり、少ない事例でも 2 人である。ところが、朝薫は 1715 年の回忌躍奉行任職記事に同僚の記載はない。しかし朝薫の家譜に記載の無い 1713 年の回忌法要では躍奉行 5 人中の一人だったことが知られており、1715 年も同僚を記してないだけと解される。1719 年の冊封で躍奉行は朝薫一人で、組踊の創始者とされているのは周知の通りである。が次回の 1756 年の尚穆王の冊封の際の躍奉行は、田里朝直で、同人の家譜に同僚の記載はないが、朝薫の 3 男朝喜も

同年月日で冊封の躍奉行に任職しており、2 人体制だったことが分かる。なお 19 世紀の尚育の冊封「戌の御冠船」では 4 人体制となっていた（『躍方日記』）。ところで回忌の躍奉行は祥月命日（法要）の 1～2 ヶ月前の任命となっていたが、冊封の場合、朝薫も朝直も約 1 年前の任命で、組踊の創作、稽古など含め相当の準備期間を要したからとなるだろう。

組踊は、物語があり、唱え（台詞）と歌（音楽）、踊りを中心に衣裳や小道具、背景幕などを含む総合芸術である。朝薫が創作したのは、物語と台詞（台本）であろうか、三線歌は既存のものを場面場面に配し、舞はどうだろう、立ち方、地謡の人選、配役はどうだろう。各々専門家が担当し、朝薫は総合プロデューサーであり、演出家だったのではないだろうか。

ところで尚敬の冊封に合わせて、組踊を創作するとの発想は誰がいつ思いついたのだろうか。冊封使歓待の新たな芸能を生み出すべく、朝薫自ら建議して事に当たったのだろうか。1 年も前の躍奉行の任命、ならば初宴の仲秋宴で組踊が披露されなかったのは何故か等々、組踊の誕生は謎だらけなのである。その後も組踊は創作されていくが、その担い手は誰か、冊封の際の躍奉行の役割、特権でもなさそうとなると、いつ、どこでの上演を目的に誰が創作していたのか、「組踊 300 周年事業」は次代への多くの宿題を残したことになる。

スクブン（宿命）

照屋理
(編集刊行委員会副委員長)

「琉球文学大系」の構想を初めて聞いたのは2018年の10月半ばごろ、波照間先生のご自宅で開催していた研究会の折であった。琉球文学およびその周辺領域の書35巻という構想の大きさに、ただ圧倒された。明けて3月下旬、東京の大手出版社との調整が行われることとなり、山里学長、波照間委員長に同伴し東京へ赴いた。在京の佐藤優氏（名桜大学客員教授）も応援に駆けつけていただいた。会合前夜、波照間委員長の友人や出版関係の知人との意見交換の場にも同席、そこでは「大系」の構想に対する様々な意見が寄せられた。照屋にとって「琉球文学大系」はこのように始まった。一度立ち止まってみる必要はないのかなどと考えを巡らす中、ふと、ある本の一文が目にとまった。

～ おもてだってはヤマト化につきすんでいようだが、胸のうちには「琉球」があざやかに刻まれていた（…）手をのばせば、そこにいにしへの琉球人のぬくもりを感じることができた時代でもあった。そんな時代に立ち会った人間ならではの、いま、何としても記録しておかねばならない、そう覚悟をきめた迫力が感じられる～

(与那原恵 2016『首里城への坂道』)

琉球国の解体間もない沖縄に教員として赴任していた鎌倉芳太郎を評した文章である。鎌倉は様々な琉球国の文物が失われていくのを目の当たりにし、できる限りの物品を収集、また写真や文字による膨大な記録を残した。戦後、それらの写真や記録の幅広さと精密さによって首里城正殿や円覚寺の御後絵、王府編纂の『古事集』など数多くの琉球文化・文学の蘇生が可能となっている。

しかし息を吹き返す文化がある一方、方言をはじめ様々な琉球・沖縄文化が少しずつ色褪せ失われ続けている状況は、現在とて変わりはない。実は鎌倉が目にとったのと同じような場面に、我々は日々立ち会っている。鎌倉の為したような仕事が、今また必要なのだ、と思いを新たにしたい。

これまでに既に全体会議2回および各巻会議が8回、名桜大学をはじめ琉球大学および沖縄県立芸術大学等で開催され、全35巻それぞれの担当が決定された。その後各巻の作業部会が順次立ち上がり、具体的編集のための調査・研究が日夜進められている。「大系」事業全体は戦前および戦後アメリカ占領期を過ごした世代、そしてその後の世代あわせて30余名の研究者で構成されており、まさに学問的メルティングポットの様相を呈している。必然、本事業を通して復帰前の沖縄も知らない自分が、先輩研究者達と学問的邂逅をすることとなる。それぞれの世代にとっての琉球文学・文化とはいったい何であるのか、その研究姿勢や情熱のぬくもりに浴することのできる幸運がそこにはある。自らのスクブンとして事業を支え先輩研究者にヌチカジリついてゆき、「大系」という30人31脚を走り遂げたい。

*タイトルは渡具知伸編集局長による。



出版社との調整会議の様子(2019年3月 於:東京)

2019年度 下半期業務報告

(10月～3月)

第1回「琉球文学大系」学内編集刊行委員会を開催

10月18日、名桜大学にて第1回「琉球文学大系」学内編集刊行委員会を開催しました。

学内編集刊行委員会は、山里勝己学長、波照間永吉委員長、照屋理副委員長、仲尾次洋子研究所長のほか、博士課程及び国際学群所属の教員、大系編集局長の計10名からなり、主に「琉球文学大系」(全35巻)の編集・刊行に関する方針や計画などについて審議します。

第1回学内編集刊行委員会では、学長より各委員に辞令交付が行われ、「琉球文学大系」刊行計画の改正、令和2年度事業計画、琉球文学大系事務局報「風」の発行について、話し合われました。



学内編集刊行委員会の様子＝18日、名桜大学本部棟第1会議室

第2回「琉球文学大系」全体会議（編集・執筆者会議）を開催

12月14日、名桜大学にて第2回「琉球文学大系」全体会議（編集・執筆者会議）を開催しました。会議には、学内・学外合わせて計16名の委員が出席し、主に基本方針や編集刊行計画、各巻の作業手順についての確認が行われました。

また会議では、和文学班や琉狂言班などのテキスト検討会についての近況報告もあり、各班から大系に収録するテキストの読み込み作業や注釈付けの作業に関する進捗状況の報告のほか、班によ

っては今年度科研費申請を行い、来年度以降は資料調査や実地調査を計画している旨の報告もありました。



全体会議の様子＝14日、名桜大学本部棟第1会議室

比嘉良雄氏より「琉球文学大系」へ寄付贈呈

11月12日、ホテルロイヤルオリオンにて故比嘉美津子さんをしのぶ会が開かれ、故人の甥の比嘉良雄氏(名桜大前理事長)より「琉球文学大系」編集刊行事業へ寄付金100万円が贈呈されました。

比嘉美津子氏は、沖縄学の創始者である伊波普猷の妻・冬子氏のいここにあたり、今回の寄付は琉球の文学や歴史研究の発展を願う美津子氏の強い意向を受けて実現したものです。



比嘉良寿氏(良雄氏の弟、右)より寄付の贈呈を受ける山里勝己学長(左)＝12日、那覇市安里のホテルロイヤルオリオン

「琉球文学大系」新規関係委員の紹介

本事業の関係委員に、このほど銚武彦氏(沖縄尚学高等学校教諭)が新たに加わりました。銚委員は、第25巻琉球和歌を担当します。

北琉球のうた探訪—解釈と鑑賞 (1)

手間戸 (伝承地：名護市屋部)

1、遊び遊びふしや をばが島 美童なみ美しさ 後が村

ばんが島 ふんぬいふんぬい <サーユイサーユイ> ※<>内は踊り手がうたう。

【訳】とても遊びたいのは「をば」(未詳)の村で、乙女の並びが美しいのは後ろの村だ。<ばん>(未詳)の村、本当か本当か <サーユイサーユイ>

2、里と退ち後の 夕間暮れと暁と 立ちゆる面影や 忘れらぬど

思切らぬど 寄テ来カイ来 <我腕枕>

【訳】愛しい彼と別れた後の夕暮れと暁に浮かぶ面影は忘れられないよ
想いを絶つことはできないよ、寄って来い来い <私の腕を枕に貸そう>



ティーマートゥーといえ、名護市汀間の娘の丸目カナと首里王府の役人の神谷との恋をうたった「汀間当」が有名だが、名護市屋部にも「手間戸」の節名で上記の歌が伝承されている。この歌の特徴は、汀間の歌が一つのストーリーをもった叙事歌であるのに対し、本歌は恋人を想う抒情歌となっているところにあるだろう。1首目の「をば」「ばん」はよくわからない。しかし、その類歌が川平朝彬「琉歌節組内粒寄」(明治36年)にヤエンサ節として収められていて、上記の2箇所の記事は同じだが、その中の「後が村」が「{わぬ/ばん}が村」となっている。「わぬ」は首里語で、「ばん」は宮古語。いずれも“私”を意味する。だとすれば、先程の2語も宮古語の可能性が考えられ、「をば」は“あなた”で、「ばん」は“私”と解せないだろうか。本歌の伝承の経緯が気になるところである。この歌は舞踊曲としても用いられており、屋部を代表する女踊りとして旧暦8月の村踊りに演じられている。今もなお地域で大切にされている歌である。(石川恵吉)

2019年度 寄付者一覧

本年度は下記の個人と企業より多くの寄付をいただきました。厚くお礼申し上げます。

【個人】喜納政佑 金城尊子 金城ふじ乃 志賀マサ子 島袋徳子 渡具知伸 比嘉良雄 眞榮城裕

【企業】(有)あすらまん・比嘉正詔

(五十音順・敬称略)

2019年度 図書寄贈者一覧

本年度は下記の個人と機関より貴重な図書資料の御恵贈がありました。厚くお礼申し上げます。

【個人】芝 憲子 (計8冊) 渡具知 伸 (計12冊)

【機関】沖縄県立芸術大学附属研究所 (計34冊)

名護市教育委員会 (計24冊)

嘉手納共栄会『さす森』編纂委員会 (計1冊)

南城市教育委員会 (計9冊)

神奈川大学日本常民文化研究所

八重瀬町教育委員会 (計3冊)

非文字資料研究センター (計1冊)

与那国町役場 (計1冊)

北中城村教育委員会 (計8冊)

与那原町教育委員会 (計2冊)

(五十音順・敬称略)

「琉球文学大系」関連新聞記事目録—2019年10月～2020年3月

琉球新報「「琉球文学大系」へ寄付/那覇 比嘉美津子さんしのぶ会」(11月13日付)

琉球新報「「琉球諸語と文化の未来」シンポに寄せて<下>/大城貞俊/言語消滅は文化喪失/次世代継承へ議論多様に」(2月14日付)

琉球新報「しまくとぅば使ってつなぐ/専門家らシンポ 歴史、未来語る」(2月16日付)

琉球新報「名桜大学主催 国際シンポジウム 琉球諸語と文化の未来/しまくとぅば復興へ提言」(2月27日付、波照間永吉・山里勝己発言)

琉球新報「琉球国独自性に注目/正史3点重文指定 研究深化の契機に」(3月20日付、波照間永吉発言)

各巻担当委員の皆様へ 次回の全体会議(編集・執筆者会議)開催のお知らせ

第3回全体会議は下記の日程で開催します。日程調整のほど宜しくお願ひ申し上げます。

開催日程：2020年6月27日(土)10:30～ 開催場所：名桜大学